

可通□□□立休ろふ時に 愛甲三郎日早く見付て 足早に 御本陣

付記

の□□行は何者ぞ 不思議□ 笠面□□□子細いかにとひしめきた

資料の閲覧、翻刻に際して御高配を賜りました宮崎県立図書館
に、厚く御礼申し上げます。

り 兄弟は□□□□□ 早や是迄也 是非に不及と思ふ時に 大勢

〔平成十二年十一月三十日 受理〕

立かゝらんとするに 此木戸口は畠山殿当番也 榛沢六郎 兼て宵

より心を付て居たり 木戸を開き おどり出 愛甲殿 此兩人は此

方の下郎に候 今晚使に出て遅く帰りたるにて候 別条もなき者に

候 近頃不調法□□□ 此方へ来れと□□ 兄弟安々と 天にも上

る心地して 木戸の内に入 榛沢に□礼して 心底には□□□過分

也 先づ□□ 榛沢□飯屋へ入て □ひやり □□安堵也 差□

□□□□ 朝政之□小屋□□□に入たるこそ 工藤が小屋也 案内

は見透かしたり 差覗けば 遠侍は夢最中也 諸方共に人静まりた

り □□□に差足して 先広敷を大手に受 □□たまり之有所迄は

そろゝと立入て 先祐経が飯屋之座敷に立入てけり

負まちく 生死之間^{あひた}勵□て 御影を見奉る事も有まじく候也 誠

に 河津殿に離^{はな}れ 母上に勘当せられ 朝夕に 父上共奉見たる十

郎殿之御影も 一世一期之見納也 とく見へ給^{たま}へや 十郎殿 又祐

成も 五郎父上共思ひて 馴染し時宗も 兄弟一世之名残ぞや 死

なば一蓮^{れん}託生^たやと 松明を□□□□ばつと振り上て 泪を袖□□押し拭^{ぬぐ}

ひ □□引出成るものと 心を□に □□□□して 腰に挟^{はさ}ん

で 十郎は案内し □□先に□□□□の□に ふり□れば 笠を傾^{かたむ}け

□□ 先差掛□□ 足助之太郎重秀仮家之前を打過るに 夜更て

通る人は誰ぞ「と」答る いや 是は御内之者也 明朝之御□来之

者、使也と答ければ 音せで 静り 打過たり 其次並之仮屋くは

原三郎 中条藤次 猪股小平六 東野六郎 那須太郎 宇都宮弥三

郎 狩野五郎の仮家之前を打過るに 皆□□□□ 殊に 夜更^ふけて

答る人こそなかりけり 爰に 稲毛三郎が仮家之前にて 夜更て人

の通るは何事ぞと 大勢立騒けり 兄弟 すはや大事と 静に答て

□苦勞にて候 畠山の雑兵也 是 御覽^{ごらん}ぜよ 割判有と 腰より出

して見する 番人はを見て 扱 不思議也 畠山殿の番者也 夜更

て何之御用ぞや 御通り候得とて 皆小屋^{こや}に入にけり 兄弟 鰯之

口を逃^{のが}れて 海野小太郎茂氏が前にて さと差留答けり 此節 早

衛と答へて 別条も無之 □□□ 割判を出しけり 海野見て □

□□□□□□□□□□ 紛れしと 後日 子細□□時と□□□□為に

この木札□此方に預かり□□□□ 取り上げられ 漸く此□

□□の□□通 □□□□ 嬉^{うれ}しや 此□□仮屋之木戸も見ゆる四辻

也 其内こそ 工藤が持家也と行所 雨は降^ふれども 四辻は篝^{かき}火を

焼 弓番人居並ぶ 若し答らる、時は 木札は取上られ 一生之大

事也 笠を傾て忍びやかに 片脇をことくと立行とする時に 折

悪しく 愛^{あい}甲^か三郎夜廻り番にして 行合たり 木戸の陰に立寄て

伊豆 箱根両所権現も照覽あれ 当来未来迄も勘当許すまじき也

曾我兄弟出立之事

我々兄弟と一所に命を落すとも 古郷へ帰り 形見送り 後之仇を

五月廿七日暮時に 曾我兄弟 年来宿願 今晚に縮 心底に悦び

心に懸くるも忠節は同前也 我々死後に 誰人か仇を心に含む人も

勇みて 古郷へは鬼王 団三郎を帰したり 何心之遺る事もなく

無之故に 斯様には申也 此上制するに不及 勝手次第と申ければ

先十郎祐成が装束には 肌之母の給はりし薄紅梅之練の肌着 上に

三人は□□□して 御尤千万 我々身に取 忝く 若返り討に逢ひ

は白き帷子の脇深く闕きたるを着て 萌黄□□之腹巻を胴斗しつか

給はゞ 我々又 御志を達べし 然ば明晩 古郷に可帰 併 殿の

と締め □□□□之持たる 浅黄之□之村鳥染たるを着て 袴□□

出立 我々が古郷に帰るに 喝食仕るべき雑人は早明朝暇遣はずべ

□を結び 馬へ□□り 箱根別当之給はりたる微塵といへる太刀を

し 三人の内壺人残り 喝食仕 君之本懷を遂げらるゝを陰ながら

横たへ 折ふし雨之降りければ 日本一之幸と 蓑を打着て竹笠か

承り届 曾我に帰るべし 鬭取して 富田次郎□□番に当たり 其

ぶり 松明片手に振立て 飯屋之庭に一人出たり 時宗出立には

覚悟に用意しけり 去程に 建久四年五月廿七日も暮ければ 鬼王

母に貫たる濃紅ゐの肌着に 黒き単衣脇之袖闕きたるに 黒糸緘し

団三郎は形見の品々取持て 式正之馬を追て 清見が関にて行もや

の腹巻して 村蝶縫いたる直垂着て 袴の裾を括り上 是も蓑笠打

らで 富士野、様子を聞居たり □案 翌朝は 曾我兄弟之面々

かぶり 松明振立て 同じく足拍子踏んで出たり 兄弟出並て 時

親の敵を討たりと 評判まち／＼成るを聞て 悦び帰けり

宗 いかにか 十郎殿 闇夜の忍び 本懷を達して以後には 定て勝

菩提之為に差上ると 可申上也 馬之鞍 太刀一腰は二宮太郎に奉

る 幼年之時より御恩を蒙り 今更難報 文は不奉 守袋には父上

之戒名有 姉君に可奉 又 五郎が馬鞍は土肥の伯母様に奉る也

行^{なまき}藤^{なまき}胴衣は富田次郎が母にとらすべし 弓矢は鬼王と団三郎に呉る、

十郎瘦馬は大磯之虎に取すべし 口上は能様申すべし 老母ばかり

に文して申也 明晩我々出立 一所□其用意すべき也と 申渡しけ

り 三人□者共 委細承り届 形見之品々を並置て 泪を流して

こは不心得仰御坐候也 我々 曾我を出る時 君より先に死を可蒙

と思ひ詰て候 其上 我々が父は□□義にて 御父上之御墓所に生

害す 其時 我々幼年 遺言して 御兄弟之御先途見届可申旨残せ

り 然に 古郷に帰れとは □□□□に□□□□思召哉 天晴 鎌

倉方之諸士 一騎合の事に可負とも不存 是非に御供可仕と思ひ切

て 可帰之心はなし 兄弟口を揃 全く汝等が心を見落すにあらず

又 我々が頼りにせざるに非 年来之心底も難忘 併し 古郷へ此

有様を老母に告 旁 残さで不叶事也 最期之供より増るべしと

繰返して言 時に富田次郎は 三人□供に この年来□に可残□に

もぞや 奉仕也 可残哉 憂きも無跡も まき果てたる世の中也

仮令^{なへ} 仰之重じて古郷に帰りたりとも 主君之最期を見捨て 心強

くも帰^{かへ}りたりと 諸人に後口 指^{ゆび}を指すは眼前也 上臈も下郎も住

果^はつべき世にもあらず 一度は死に極りたり 兎角 可死ときは是

非に当前 武門之儀□ 又 死兼べしと思召す□□なり 御前にて

腹切べしと 既に浮雲見へたり 兄弟押留 不届成者共哉 元来此

度の敵討 本懷達する事希也 工藤は大勢ひなれば 兄弟又は返討

に逢は^あ残念也 其時に 誰有て 又我々が敵を可討人もなし 汝

等三人より外になし 左様の□には□□□□はで不叶 此上は達て留

る不及 如何様 汝等が心次第 □□事 承引あらずば 生害及□

思□□□へ 兩人年来之宿意は 只明晩にあり 兄弟相談して 三

人之郎等は曾我之里へ可返也 兄弟の敵 家人召連ては後代之嘲也

明日に至りて 古郷の老母へ之書置 二宮殿の姉君 土肥之伯母

曾我殿へも一紙を可殘也 別紙に□事繁し 兄弟連名にて 十郎筆

を取 一紙毎に五郎と半分づゝ 手跡書分け也 其夜は五郎と睦ま

じく 今生名殘之一夜 一所に伏すも今宵ばかりと物語り 誠に哀

無常之心底也 夜更けて五郎申は いやゝゝ 昼は人目の候へば

今晚相認て 三人□者共に□暇乞 明夕 我等出立 一所に古郷に

歸へすべしとて 兄弟は既に燈火に向ひ認めり

書物毎に 此書置は廿七日之晩に書たりと有 以之外成相違也

短夜之最中 夜討に出立 取込ん□□として 廿七日夜に認らるべ

きや 前夜廿六日夜に認たり 廿七日には 鬼王 団三郎を歸しけ

り 扱 兄弟は文認めんとて 兩人書分にする時に 流石心は遅れ

ねども 老母之かゝる事 今は知り給はず 露ばかりも為意不申を

恨み歎給ふらんと 今一際之泪也 扱文章は

抑 祐成五歳 時宗三歳の冬 父河津殿に奉離 建久四年五

月 今日迄 暫も敵之名を忘る事なく 日の本之諸神諸菩薩

に深く札誓を尽し 東西南北の路徑に 荆棘之間に屈まり

年月を送り 今月今日に至り 父の為 兄弟之一命を奉り畢

御思ひ出之折毎に 經念仏を奉頼 御歎之程を存候へば 不孝

と申は余り有 是偏に 前世之宿業と思召 更々御悔不可有

別て 五郎をば 御勘氣御免を蒙り 心能最期仕 悦びに余り

候と 兄弟一生涯之有様を悉く書載て 文相認畢りけり

斯て 鬼王 団三郎 富田次郎三人を呼びて 我々は明廿八日之

晩を限りに思ひ詰たり 明夜 我々忍出立申 一時に 曾我之里に

形見を送り届べし 先白き帷子二 今迄我々が着古したる直衣を

つて 工藤に不來や 向後は 來り給へ 五郎にも此旨伝へやと

兄弟形見送り之事

酒肴を進め 馳走申しけり 十郎聞すまして 只 □叶□ 以来は御

待と成ては 一切之事難□もの也 既に 十郎拾出て漸三時に成

介抱□奉れとて 一礼して この以後 何の隔心之候べきと □□

五郎は心空に成り 大に氣遣ひ 鬼王 団三郎 富田次郎 立たり

□□けり 祐経は犬坊丸を呼て 祐成殿之御盃いた頂き 以来は兄上と

居たり 既に迎に出んと思へ共 十郎堅申置 禁足と言故に 待あ

奉拝と 十郎殿にも弟と思召給るべしと 酒を進めけれ共 十郎拾は

ぐみし所 漸 黄昏時に 十郎歸りけり 此日は五月廿七日也 扱

一滴も吞ず 扱 飯屋とは申ながら 能御住居にて候 犬坊丸と打

十郎は五郎に申様 扱も飯屋の 町格子見すまして □□□が幕

連 部屋やの詰り 諸士の詰番所 広敷 台所 寢□□ろの

より徘徊之時に 祐経呼入て □□の次第□也 酒を進け

辺 飯屋之事 左迄広くもなかりけれと 委細見すまし 暇乞して

れ共 若しや毒にもあたらんやと 一滴も吞ざりき 今は心易く思

立出たり 直に宿所に歸りもせで 畠山殿へ立寄て物語 明廿八日七

ひ給へ 工藤が飯屋の□□詰り 小屋之案内 詰り 無残見極

には 狩場得物存□て候 余所ながら □□念頃に一礼 和田□□

たりと言 時宗大きに悦んで 絵図に□して 諸大名之飯屋不残

ては歸りけり

十郎物語しけり 事多品略之 扱 辻々は 大簀か 白昼の如くなら

ん □□□□また安からん 諸大名之飯屋に□□□ 咎人もあら

ず 木戸の番人は 今晚は愛甲三郎 明晩は畠山殿なり 心易

氣遲して可逃行あらず。また無駄に 手込にすべき様あらず。幸の

事 飯家之案内 悉くに見届可申ものとと さらぬ駄にて 工藤が

飯屋に入にける 座敷に付て見れば 吉備津宮之神主王藤内出て

手越之少将 黄瀬川の亀菊 鶴松など 酒宴最中也 彼の亀菊は

虎也 それとは見れども 双方共無双利発 更らに見やりもせず

始終 不知る分也 祐経言は 十郎殿□饗応せよ 酒肴参らせよと

言ひ騒げども 祐成は もしや毒味にあたらんやと 一向に酒吞ざ

りき 祐経 十郎に言は 扱 貴方兄弟は父河津が敵を日夜狙ひ給

ふ由 承り及たり 夢々左様之心あるべからず 以の外之心得違ひ

なり □皆世之中之人心 善きは妬み 悪きは悦ぶ慣ひ也 されば

悪しき様に申なし 貴方若年にして 倅に知給ふまじ 工藤こそ惣

領なれば 某こそ伝ふべきに 貴殿之祖父祐親入道 本領を悉く押

領し給ふ 祐経には一所□丁も分給はず 一旦恨べき事なれ共 我

には京都住居也 思ひながら延引之処 各之父河津殿 奥野、狩り

に 流失に中り討「れ」給ふ □ふ又 赤沢山にて相撲取て 股野

五郎景久勝ち 意恨を含みて 景久が闇討にしたりと言ふ 左様

工藤跡にて聞之 世に残念に候へ共 □□ 我家人 八幡三郎 大

見小藤太兩人をば 伊東九郎討け□□□□ 是卑怯千万 公務を可

得之処に 世も時もかわり 鎌倉の御代と成りければ 我が本領安

堵の事なれ共打過申たり 全く□業也と 一途に思ひ給ふ事な

れ 大成る僻が事也 真は 祐経 兼て貴殿兄弟の事も 鎌倉殿よ

り 彼□申し奉仕をも有之□□可申上と存候 □ この所に居

給ふ王藤内も 他人成共 工藤□給へば 取□□領之主に帰らる、

他人の事さへ如此 況や 一家之由緒 常々疎略候べき 以来 兎

角工藤を兄弟の親と思ひ給へ 又は祐経も所縁を思ひて 更に疎略

候まじ 常々土肥 三浦 北条 畠山「へ」被参るに 何之恨みあ

祐成 工藤と対面之事

去程に 十郎祐成は 帰りに可語と 飯屋／＼を見覚へて
 彼之庵に木瓜の幕を見て 是こそ我が家之紋也 工藤が幕に疑ひな
 しと 差覗き見て 扱も果報之ゆゑ、しき工藤哉 飯屋も夥敷立続け
 遠侍には家の子郎等諸士 酒肴を儲て 飯屋之慰み 取り／＼也
 下家の方を見渡せば、馬数拾疋 飼立たる荒馬共いな、きつれて
 飼葉を乞ふ 又は 広敷 台所は 料理珍肴種々 酒宴の最中 立
 並ぶ 奥の方を見やりければ、工藤祐経は 吉備津宮之神職を相手
 にして 手越之少将 祐経が思ひ人と見へ 王藤内は鶴松と帰る
 黄瀬川随一之女郎と酒呑んで 遊興最中也 爰に 黄瀬川亀菊と名
 を盛たる端女有 能見れば、大磯之虎也 十郎慥に見覚へて 扱も
 不思議や 然も娘の風俗にて 虎御前此所に可居様なし 似たる人
 か 若しや誠之虎ならば、兼て知る 十郎本懐を達する□道しるべ、

せんと思ふならめ げにも頼母しき女也 然と言へ共 我手引に内
 に入たると 世の評判も気の毒成れば、とかく不知が能也と さら
 ぬ牀にて詰かく 無残遠目に窺ひ 見終りて 扱も 五郎□来れか
 し 押込打 討果すべき物を 早や／＼ 迎も今晚は遁すまじと
 暫く此所に徘徊して居給へり 然処 工藤が嫡子犬坊丸 其辺を立
 廻りて 十郎を見付て 急ぎ内に入 父左衛門に向て 十郎殿の参
 り給ふと言 時に 工藤言は 何 十郎とは誰事ぞ 十郎こそ是多
 かりき 今度之供奉之中には 藍沢十郎 横山十郎か 此外之十郎
 は我親しからずとよ 粗忽の物の申条やと 申たる 犬坊丸 いや
 左様候はず、曾我十郎殿と言ふ 祐経聞て 曾我十郎は親敷
 人 又用事あり 此方へ呼入候へと言 この故に 犬坊丸 侍共に
 申含 祐成を相招きける 十郎は此節 序悪しければ立帰りける所
 に 跡より追かけて 頻りに呼戻す 十郎思ひけるは この所にて

給へ 三人 郎等にもしかくの事ども申渡して 廿七日昼下り

折節雨の晴間に内仮「家」に差かゝる 如案 愛甲が家人共 何方

へ通るぞと咎る 畠山殿の従者 注進の者と言へり この故に押開

き通しけり 十郎夫より内仮家に入 諸大名之仮家を見て 工藤が

小屋まで来りけり

曾我根元評判大全 卷之拾貳

本章

曾我十郎祐成は 工藤が仮屋に徘徊す 時に犬坊丸見付 祐経に

告 工藤 十郎を招き入れ 辞退に不及 座に入 此節 工藤は

敵にあらずの旨を委細に語る 十郎は彼是として 仮屋之住居 端々

迄見届帰り かくて 兩人は古郷へ形見送り 消息を認めり 鬼王

団三郎 富田に命じて 古郷に帰れと言 三人大に歎き 我々年来

之旧功 只今晚一時にあり 何とて左様に被仰候哉 面々の最期

不可然と之思召にや 左様候はゞ 生害可仕と申 断れり 種々に

言ひなだめ 各同心して 廿七日夜に入 出立 曾我之里に帰りて

富田は其夜の次第見届 古郷に帰り 物語にせり かくて兄弟は

兼て 最期之装束は貧窮之内より用意して 下には小腹巻して 布

の狩衣折絞り 白綾畳んで 鎖入之鉢巻して 兄弟松明点して 互

之暇乞ひして 火を消し 是より役所之木戸口々を 和田 畠山の

心入にて 無恙通り過ぎし 案内は見届たり 終に工藤が座間に入

誠に鉄壁之如き兄弟が心底也

十郎出て待遠成るに 五郎は能も忍びたり 是常に詞之慥成る故

也 十郎は律儀にして 心の落付人にして 仮初にも詞に無相違

貞実之人也 この故に 兵書に 水は杖を以察し 人は詞を以察と

あり 常々の行跡一大事なり

て 密に申送るゝは 此度 富士野^{不二}、御狩之御場 忍んで被致候段

感じ入事に候 御介抱被申度候得共 此頃は申□不申候 終には

多年の本懷を被為達□ 序に申入□ 御狩□既可止に候処 彼是評

定有り 明廿八日には昼より御狩に被成 廿九日晦日には 浮嶋が

原清見□□□にて 鎌倉^江へ帰御之御沙汰候 既に早や 何は極りて

候也 然ば 早兩三日の間に事決し候 御心を一筋に 命を際の御

働き可有之 □心底察入候 用事も候はゞ 可承候 心易く申越給^上

へ 扱 昼のうちは仮屋へ入来らるゝ浪人も咎め 番人制可申候之

条 畠山次郎重忠^本へ注進^{もの}の者と言って やり過ぎ給^すへ 誰制する人も

有まじく候 夜に入ては 是迄は打込番人にて候処 重忠□□候へ

今三人□□□に仕候也 今晚廿七日^五は 工藤左衛門祐経にて候 明

晩廿八日^六は 愛甲三郎季隆^本にて候 明後日廿九日^七社 重忠が当番に

て候 内仮屋御門の固めには家従本田次郎を差置て 外番は榛沢^半六

郎を差置候 又 内仮家詰之案内は本田次郎可仕と 夫とは慥にな

けれども 一々委細不残被申越たり げにや畠山殿之情 海か山の

如く 重忠は只 兄弟を不便がられたり 十郎^拾 五郎は承り 感涙

を流し 扱も重忠公之御心入 生前に難報 世々未来 忘却仕間敷

く 如何に一兩日之内 是非粉骨を振ふて 能得物可仕にて候 廿

八日より巻狩に候はゞ 廿九日迄とこそと存□とて 榛沢^半を帰^返しけ

り 其折□て 十郎^拾は五郎を近付て 誠に畠山殿之恩難忘と言へば

如何にも思ひしに 昼も壺人通るには 畠山殿家衛と可答 明廿八^七

日 重忠之番なれば づゝまる所 明後廿九日^八晩に忍入て 是非に

本懷を達すべし 案内不知して難成事也 十郎^拾は明廿八日^六忍びやか

に内仮家に入て 無残案内見届可来也 相構へて 五郎に 帰る迄

は外へ出給ふな 仮令^{たとへ}いか成事有るとても 十郎壺人本懷は達スマ

じぞ 五郎はいか様之事あるとても出給ふなよ 十郎^拾が帰来るを待

未聞之見物也 又 此度工藤が推拳の一札等 富士野飯屋□来り

祐経が相手と成り 扱も 飯家〳〵に遊君は有り 此方も申たらん

□□者強し 随一之白拍子 遊女三□差越 と□□□之仰也

黄瀬川に申来る □□□聞之 俄に届 □ろき 大に悦んで 願て

もなき天の与る所也と 色優れたる白拍子三人召連れ 其身は端女

に出立て 飯家にこそは被参たり げにや 髪形ちとや 虎御前と

言ふ人なかりけり 祐経 王藤内は 白拍子よりは先 端女之亀菊

こそ容よけれ 此方に来れよと座に入 祐経言ふは 扱能生れ也

飯令 いか成る白拍子も 此容顔ほどにはあらじ 大磯之虎に扱も

能似たりと 色々に馳走して 白拍子を□□けに 此黄瀬川と座を

話す 只酒宴の相手と成□□ 大磯の女郎達を夜の寝所之相手とな

し 其隙を窺ふ 哀 十郎□□□られよとかし 寝たる間もあり

虎御前は 工藤が飯家は内外自由に遊廻り 詰り〳〵無残所 住居

ども見届 自然の時と相待けり 如何様も三拍子揃と也 □□□□

□□□□□を取たるごとく □□□では 是程之大望は 不叶□□

也

曾我兄弟之別□畠山殿使之事

曾我兄弟は 随分念を尽せ共 工藤が飯家は内飯家にて 御所之

近く也 折々 狩場□出ても 頼朝之御馬そば去らず 出頭人 ま

た 曾我兄弟が来りたりと聞 用心厳しく 是非□□□ 彼是して

漸々 此程は糧果も尽て 曾我太郎祐信之陣屋に忍居たり 鬼王

団三郎 富田次郎 所々方々聞繕ひ窺ひ 工藤が噂を聞居たり 既

に月日重なり 五月廿七日にこそ成りにけり 此四五日は霖雨打続

狩場□奥も薄かりけり 然処に 畠山重忠より 曾我兄弟之面々

此□□狩場にも見かけずと 竹葉一瓶持具て 榛沢六郎成清使とし

に 幸い 駿河の黄瀬川也 此場所 酒店 遊君も有けるが 此時

皆悉く 裾野、仮家へ参る 大勢ひなれ共 仮家に行足らず 此故

に 大磯宿之遊女共 我一にと来り 諸大名之酒之相手に成りけり

爰に 虎御前は 十郎常に 仮そめの他行をも物語り有るに 此度

□□□ 便りなし 曾我の里に尋れば 兄弟 富士之狩場に出給ふ

と聞 鬼王 団三郎も供と聞て 扱は疑ふ所もなし 工藤を討んと

の覚悟ならん 然共 討不問敷ぞや 祐経は関東の切り人也 其上

大名也 用心厳敷 家人列卒千人余り召れたりと聞 兄弟只式人之

分にては □□□討給べきや 雖然 忍ぶは 未だ何やも可有也

思ひ煩ひ給ふ時に □度 仮屋に遊女を召る、 日本無双之幸ひ

然れ共 我は人も見知たり すべき様非ず 言へども 此儘に可止

に非ず 十郎殿之婦也 仮令 我身はいかに泥土に沈むとも言ふべ

きに非ずと 老母にも深く隠して 遊女共 宿にて名取誰彼に □

したる女房達三四十人召連て 虎御前は此女郎の親方と成り 黄瀬川に來り 今度も形□ おしまかめて 今の世の遣手と言ごとく

名は黄瀬川の亀菊と改て 諸人見違へる 黄瀬川中の遊女共 亀菊

に背く者なし 此故 亀菊方へ申送り□ 幾人も自由に成り □□

長之事なれば 左様之有事 仮家中亀菊を頼めり

爰に 備中国吉備津宮の神職 王藤内と言者有り 彼は源家の侍

妹尾太郎兼保が親類にて 世盛りの者なり 平家西海へ落下の節に

妹尾太郎組したる罪科により 年頃之世帯神領 悉く□□せられけ

り この故 流浪之身に成り 京都より縁を求め 鎌倉に來り 工

藤左衛門□神社之奉行を兼帶す 此故に ひたすらに祐経を頼みて

神領の事を歎く 祐経一門に公務を結び 既に旧領之神領□御供

旧祐家領悉く 初之如く寄附せられける 年来之愁眉をひらくのみ

か 巻物黄金も給はり 直に本国に帰りもせで 此度之御狩 前代

一筋成仁田故に 大方は神靈成るべしと 合掌して奉見ば 何やら
 ん真黒なるもの 鹿の上に座し給ふ 光明は輝とも 紛ろふしく不
 返 御正躰拝れ不付 仁田四郎 信心俄に起り 哀 神靈哉 忠常
 賢しくも 此穴に入て かゝる神靈を奉拜 世界に出て 頼朝へ能
 に申成 此神靈之上に一社を崇め奉る様に可申 正躰を可奉拜と信
 心を起し 時に 一風来る 蘭麝の香 常楽我浄の風成るらん 此
 後 空穴奥の方にて 音楽聞へて 寂寥し 静にして殊勝なり 此
 時に 彼之大鹿之上に拝まれ給ふ御姿を奉拜 今の世之虚空蔵菩薩
 也 仁田拝して 願くは 此末一步も不進 又 跡へ行んも道絶た
 り 神力を与給へ 送り返らせ給へと □願して 立帰らんと 三
 人の者共 揺すり起して 漸々心を付 帰りに赴く時は 空穴の奥
 より光明輝来り 無躰に風吹 押出したり 次第に風吹□る、先
 達て 松明も腰縄も皆吹卷かれて 先に出 跡より 仁田四郎 三
 人風に吹出されて 只茫然たり 仁田小四郎は土氣に当り 絶死す
 る 以後 人心不付 終に死せり 郎等式人は即時に死したり 仁
 田四郎は 漸く半時斗氣遠く有けるに 療養して快氣し 空穴の
 中之次第 頼朝公に申上 頼朝公聞召て 大氣に感心有り 始終に
 仁田が働き 常之人不可叶 空穴之中 誠疎略有まじとて 安田判
 官に仰て 俄に縄張り有り 神穴の前に縄張り 白幣を立すべき也
 と普請を企 空穴之上に大宮大社を祭り 社領一百丁を寄附 四季
 之祭り 誠に希代の神ん穴成り
 大磯之虎黄瀬川に来る事
 既に日を重 折々は雨 又 毎日御狩も難成たく 酒宴にて日を
 暮さる、事も有 此故に 頼朝 狩場之内へ遊女 白拍「子」を集
 め 諸人労を慰み候へ共 内意有之故に 諸方より 白拍子集□□

傾て □□も□□さらばとて 彼人穴の下 式間斗り 一文字に飛

んで入たり 是 彼繩を付間に七百尋余り入たり 細繩のぢり

くへ行にこそ 仁田無事にて歩み入とは知れたり 去程に 仁田

四郎は 初発廿間ばかり行て 真闇に成り 明松振り飛く押行に

風一通吹 鮮き事 只死人を火葬する煙りの如し 然共 何条物か

はと押行に 段々狭く成る 扱は是迄哉と思へども 穴筋不絶ゆへ

に 亦 四五拾間行と 左右に広く 明松振れども障らず 端に寄

て見れば 岩石滑らかに 何様 左右拾間も可有 下は清水湧くに

□より 何やらん落るを見れば皆蛭也 能ぞ笠は着たり 袖も袂も

蛭之垂るるを押払ひ 過行事 漸々百間ばかり 然る所に 空然と

して心とろけ不動之時に 竹筒之水薬の氣付飲んで 又進み行 下

は何にて深き事 一尺斗り 水をたゝんだるごとく也 弥進んで行

何之別条もなきやと思ふ所に 風一通り吹来り 此穴俄に震動し

山崩の如く夥し 今は絶躰絶命之場 最期と見へたり 何様 希有

の事有べきと思ふべし 又涼風来り 速やかに進行社 今は歩行で

式拾町も来るらん まづ止て 兵糧を認め 腰かけ休息して また

進んで行に 前後左右は尽くともなく 穴を離れ 只広々として

只何とやらん明るく成 朧月夜の如く 今は松明も要ず 扱も嬉し

きと思ふに 真白に河の如く 横にたなびく この光り 只光明の

ごとく 諸々の明るきは此の輝る也 能見れば皆水銀也 此水銀を

汲んで 竹筒へ入て持帰れり 則頼朝へ献ず 上々の水銀也 扱

河を渡らんとすれ共 両足動ず 遂に 河の向に一段高き岩角に

唯々光明輝きたるもの有 能々見れば 彼の十七日に 工藤が射損

んじる八股の大鹿也 前膝折て □に見へたり 三人の者共は心氣

憊みて 茫然として 是非不弁中に 忠常は無双之勇士にて 観念

して見渡す時に 心茫然として定かならず 難堪 心底律儀にして

涼風来り 此程の鬱を晴し 音不思議にし給ふ 古来より 斯様之
 所は不渡が能也 すべて 蛇の住む地は不潜 変化の住む野は不行
 もの也 然ば 此空穴も潜る事禍する事也共 不思議千万 末代に
 如何成る患に可成哉 難心得 此内 若靈穴ならば 一社を祭り奉
 ん 若又 空穴之時は 埋崩すべし 誰か此内を見届来る者の可有
 哉 若 入見届たる者有之ば 武勇の大きに極る所也と宣ふ なれ
 共 誰一人 潜らん□ふ人なし 尤也 仮令 如何成福貴榮耀之身
 に成り 武勇之名は取とも 大に嫌ふ事也 諸人 目と目を見合
 暫有り 外処より 仁田四郎忠常進み出 上意を蒙り 四郎潜り入
 見届可参候 勇剛之極る所も望にもあらず 誰人にも不潜所に入
 て 十八九つ 一命可終覚悟也 大将之御望を叶 又 此穴霊場之
 時は一社を御建立 只 末代人口之誉也 仁田に命ぜらるべしと
 □而申上たり 誠に無双之男と見へたり 頼朝公 大に感心有り

然ば仁田 潜て見て参れ 其用意は心の儘にすべしと 奉行は江間
 小四郎を付らるゝ げにや 仁田 入て再び帰り可来とは不思 往
 昔 近江国甲賀三郎は 空穴に入歸りて 七世之孫に逢ひたる例し
 も有り 夫は不慮之穴に入り 是は用意之穴に入 ひとへ 最期と
 覚悟する 先 明松数拾本用意 腰付之縄 跡より継ぐごとくに用
 ひて 腰兵糧引付て 仁田舍弟 仁田小四郎忠晴 并 若侍兩人を
 召具す 彼等は皆腹巻を□たり 裾括り上 明松 兵糧□て□竹
 之筒に水薬入 三人に持せたり 扱 四郎忠常は 千種色々布之下
 着に紅の腹巻して 草色に金紋摺つたる狩衣之袖括り上 戦場之雨
 笠革張にして 是を引被り 重代の太刀を差違て 松明振上げ 片
 手は腕□を入 長縄の端取て 三人の郎等に下知するは 汝原 地
 獄迄も仁田が腰に繋がりに来れ 穴の口にて狼狽へな 若し狼狽へば
 打捨にするぞと申含て 出立たり 頼朝の御所にて御盃 土器三盃

り 彼人穴に入 漸々三時斗の内に 能悉見盡して 洞穴を出 頼

朝に申 此処に富士の大宮 俄に社を造立あり 霊場と崇め奉る

誠に以て 不思議成る事也

頼朝之狩場数日故に 黄瀬川に白拍子 遊女大勢集り 諸国武士

皆 福ひ求て 徒然を晴らす 此頃は狩場之小屋に呼寄する事と成

り 然ば、大磯の虎御前は 兼て知る 兄弟之人々 此度 富士野

、狩場に出給ふ 聞て 扱は工藤を討つの好「機」ならん 中々

客界には不可叶 夫之為に泥土に身を沈め□ 不可悲と 姿を變へ

て出立 黄瀬川の亀菊と名を變へて 女郎の親方と成り 工藤□仮

屋之内へ入 誠に 女の心にして可感事也 夜討之晩にも大氣に働

き 案内の道筋と成りたり

凡 天地之間 □□して 広大に広く 無窮 その間に万物化生

して 世に神あり 仏あり 人あり 禽獸有り 草木あり 変化妖

怪 様々の不思議 まづ第一 合点之行ぬは潮之差引 星氣之廻り

昼夜行導 或は 小き針に磁石の北に向 何に付 不審多し 近

代 富士山焼て 宝永山出来 砂降り 其外 中昔には 荒井今□

に螺貝抜出て 海に成る 斯様之事 其道理變わらず、不思議□事

又 代に不思議は 富士山の大宮の人穴也

仁田四郎忠常富士野人穴を潜る事

爰に富士の人穴有り 今の大宮の外迄 常に風吹出す 冬は暖氣

夏は涼風あり 折々音響之音聞ゆる 亦震動する 此故 人穴と

□□□いふ 狩場之御殿より去ル事式里余也 既に 此辺より 十

七日十八日之大鹿 大猪の出たり 林木茂りて 列卒 馬廻り 雜

兵 諸士 歩行立にして 大夫数拾疋引せて 此所に来り給ふ 時

に かの穴の内に人音の聞へし程に 頼朝不思議に思召給ひし所に

翻刻『曾我根元評判大全』

卷之拾壹、卷之拾貳

後藤多津子

凡例

本文は底本通りに翻刻することを主眼としたが、読解の便をはかつて次の処置を施した。

- 1 句読点に相当するところは一字あきとした。
- 2 仮名は現行の字体に統一した。
- 3 片仮名「ハ」「ミ」「ニ」は捨仮名の場合を除いて平仮名扱いとした。
- 4 仮名の清濁については、底本にない濁点を適宜補い、補った文字の右に・を付した。
- 5 漢字は通行字体を用いたが、慣用字は底本のままとした。
- 6 反復記号は底本のままとした。
- 7 明白な誤り及びわかりにくい宛て字は適宜改め、底本の文字を振り仮名の位置に残した。
- 8 底本に振り仮名がある場合は、その振り仮名にへゝを付して7と区別した。
- 9 脱字は「」内に補った。
- 10 損傷等により判読不能の部分は、字数のわかる場合には字数分の□で、字数のわからない場合には□で示した。

翻刻

曾我根元評判大全 卷之拾壹

本章

斯て 富士^{ふじ}之人^{ひと}穴とて 神穴之洞あり 常々涼風出る 折節^{せつ} 鳴
 動する 古来人穴と言伝へり 是 今の天宮の場所也 頼朝公 深
 く不思議し給ひ 此大山の内 何様の申子細可有 誰人^{たれ}にても潜^{ひそ}り
 見る者は勇剛之猛虎と被仰 雖然 御前伺公之諸侍 前後を見合^あせ
 一立も無之時に 四郎忠常^{すけ}進み出 某 上意を蒙り 見届可申と言
 げに不敵成仁田と見へし 頼朝悦^{よろこ}び給ひて 即時に 四郎上意を蒙